



Data

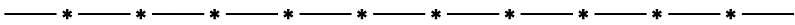
監督：ヴァンサン・ペレーズ
 原作：ハンス・ファラダ「ベルリンに一人死す」（みすず書房刊）
 出演：エマ・トンプソン／ブレンダ・グリーソン／ダニエル・ブリュール／ミカエル・パーシュプラント

👁️👁️ みどころ

一人息子が戦場で死亡！日本なら「名誉の戦死」として悲しみを隠し、「天皇陛下万歳！」と叫ぶところだが、この両親は・・・？

反ナチ思想の持ち主でもないのに、「総統は私の息子を殺した。あなたの息子も殺されるだろう」と書く抵抗を思いつき実行するのは大したものだが、止むにやまれずそんな行動をとった両親の心情とは？すごいのはそれが約2年間も、285枚も続けたことだが、その効用は・・・？

後半の逮捕劇があっけないのは意外だが、考えてみればそれも当然。その分だけ余韻が強く残ることに……。英語劇の違和感は少ないが、それでもやはり私は断然ドイツ語劇派……。



■□■また新たに、ナチスドイツ批判の視点が！■□■

ナチスドイツやヒトラー、そしてアイヒマンらの犯罪性については、『シネマルーム39』では、「ヒトラーもの」と題して、『手紙は憶えている』（15年）（83頁参照）、『ヒトラーの忘れもの』（15年）（88頁参照）、「アイヒマンもの」と題して、『アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男』（15年）（94頁参照）、『アイヒマンの後継者 ミルグラム博士の恐るべき告発』（15年）（101頁参照）を掲載した。また、『シネマルーム38』では、「あらためてヒトラーを考える」と題して、『アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち』（15年）（150頁参照）、『帰ってきたヒトラー』（15年）（155頁参照）を掲載した。

このように、戦後70年以上経った今でも、第2次世界大戦下におけるナチスドイツの

恐怖政治を題材にした映画は絶え間なく作られているが、ここにまた、新たなナチスドイツ批判の視点が誕生した。

■□■原作の英訳本の大ヒットから映画化へ！■□■

本作は、原作の英訳本が大ヒットしたため映画化が決まったようだ。本作の公式サイトには次のように書かれている。すなわち、

本作の原作は、ドイツ人作家ハンス・ファラダがゲシュタポの記録文書を基に、わずか4週間で書き上げたと言われる「ベルリンに一人死す」。実在したオットー&エリーゼのハンペル夫妻をモデルにしたこの小説は、アウシュヴィッツ強制収容所からの生還者であるイタリアの著名作家プリーモ・レーヴィに「ドイツ国民による反ナチ抵抗運動を描いた最高傑作」と評され、1947年の初版発行から60年以上経た2009年に初めて英訳されたことで世界的なベストセラーとなった。

続けて、同サイトには次の通り書かれている。すなわち、

この反戦小説に深い感銘を受け、自らメガホンを執って念願の映画化を実現させたのは、1990年代に『シラノ・ド・ベルジュラック』『インドシナ』『王妃マルゴ』といったフランス映画の歴史大作に相次いで出演し、美男スターとして一世を風靡したヴァンサン・ペレーズ。ペレーズ監督自身、父親がスペインの出身で祖父はフランコ将軍のファシスト政権と戦い処刑され、母親はドイツ系でナチスから逃れて国外へ脱出したという過去を持っている。本作では、息子の死をきっかけにナチの独裁政権に反旗を翻した平凡な夫婦が、ゲシュタポの捜査網をかいくぐりながら2年間にわたって孤独で絶望的な闘いを繰り広げていく姿を、静かな畏敬の念をこめて映し出す。

■□■なぜこんな邦題に？原題は？■□■

手紙や葉書をテーマにした映画や歌は多い。新藤兼人監督の『一枚のハガキ』（11年）はその1つだ（『シネマルーム27』91頁参照）。同作では出征兵士が妻に届けて欲しいと戦友に託したたった一枚の葉書がテーマだったが、本作は、『ヒトラーへの285枚の葉書』という邦題の通り、1人で書いた285通の葉書（ポストカード）がテーマ。

1984年3月の江崎グリコ社長の身代金要求誘拐事件以降、日本中を震撼させたいわゆる「グリコ・森永事件」では、江崎グリコに対して直接送られる身代金要求の脅迫状の他、新聞社や週刊誌に送りつけられるさまざまな挑戦状が大きな特徴だった。驚くべきことにその犯人は、1年半の間に、警察には挑戦状、企業と報道機関には脅迫状と挑戦状を計144通出している。それと同じように、本作では明らかに文体を偽造して書いた反ナチを訴える285通のカードが次々と街中に置かれたから、その書き主と置き主が誰かが大問題に。

このように本作では、どうしても葉書に焦点がいつてしまうため、『ヒトラーへの285枚の葉書』という邦題にも納得だが、本作の英題は『Alone in Berlin』。その意味はストーリーが深刻化するにしたがってハッキリと見えてくるから、本作ではこの英題の意味もしっかり考えたい。

■□■息子の戦死を知った両親の決断は？■□■

召集令状や戦死の通知が事務的になるのはやむを得ないと私は思うのだが、一人息子ハンスの戦死を伝える事務的な封書に納得できなかったのが、母親のアンナ・クヴァンゲル（エマ・トンプソン）と父親のオットー・クヴァンゲル（ブレンダン・グリーソン）。オットーはナチスの党员ではないが、軍需工場の職工長として真面目に働いている労働者で、「反ナチ思想」の持ち主ではない。しかし、戦死した息子に対するあまりに冷たい事務的なナチスドイツやその「総統」たるヒトラーの仕打ちを考えるうちに、次第に・・・。

その結果、オットーは1枚のポストカードに「総統は私の息子を殺した。あなたの息子も殺されるだろう」と怒りのメッセージを書き、これを街中に置くことに・・・。しかし、こんな行為は、日本で去る7月11日に施行された「テロ等準備罪」を新設する「改正組織犯罪処罰法」に該当するのでは・・・？そして、今の日本でもそうなのだから、パリを占領したことによって戦勝気分が盛り上がっている1940年当時のドイツでは、ベルリンでこんなカードが見つければ犯人は直ちに逮捕され、死刑になってしまうのでは・・・？

■□■ポストカードの効用は？2人の満足度は？■□■

反ナチのビラを撒き、逮捕され、処刑された事件は、『白バラの祈り ゴッティ・シヨル、最期の日々』(05年)で有名だが、それは大学生たちの組織的な反ナチの抵抗運動だった。それに対し、本作が描くオットーとアンナのポストカードは個人(夫婦)だけの抵抗。したがって、1度や2度はヒトラーへの腹立ちからそんな行動をとっても、それを継続するのは難しいのでは・・・？

一方ではそう思えるが、2人とも馬鹿ではなく確信犯だから、自分たちの行動がゲシュタポに露見すれば即逮捕され処分されることはわかっていたから、ポストカードに指紋を残さないことはもちろん、その置き先やその行動を目撃されないこと等の注意点はしっかり守っていた。「グリコ森永事件」の犯人のように、新聞社や雑誌社へ愉快犯的に投稿することも、もちろんない。人間がある行動をとるについては、普通その行動の効用を考えるはずだが、2人の場合は自分たちの行動の効用を知ることは、それがマスコミ報道される可能性がない以上まず不可能。逆に、ポストカードの数=犯行の数が増えるにしたがって、犯行が露見する危険も大きくなってくるのは当然だ。

他方、1枚目のポストカードを回収した時から、その文面を見て、犯人像を戦争で一人息子を失った両親だと特定し、犯行回数が増えるにつれて置き場所や文書の特徴からさら

に犯人像を絞り込んでいったのがゲシュタポ（秘密警察）のエッシェリヒ警部（ダニエル・ブリュール）だ。本作に見る、当時のゲシュタポとナチス政権との（力）関係は興味深いが、エッシェリヒ警部の本作に描かれる「思想性」も特筆ものだから、本作ではそれにも注目したい。結果的に約2年間に及んだ2人の犯行をスクリーン上で見ながら私が注目したのは、ポストカードの効用は？2人の満足度は？ということだが、さて、それは・・・？

■□■逮捕は必然？もう少しまく・・・？■□■

本作は、オットーとアンナのポストカード置きによる抵抗がメインストーリーだが、オットーが住むアパートには当時のベルリンの世相を反映するかのよう、①反体制的な判事、②ナチスから身を隠すユダヤ人、③筋金入りのナチス党员、④密告者、等の興味深い人物が住み、少しずつそのキャラを見せてくれるので、それにも注目！

そこである意味、オットー以上にかわいそうな目に遭うのが、エッシェリヒ警部は絶対犯人ではないと確信しているにもかかわらず、ナチスの上層部からの、極端なことを言えば「誰でもいいから早く犯人を逮捕して処罰しろ」というハチャメチャな命令のために、警部が処罰してしまうことになる男だ。犯人が逮捕されれば、以降ポストカード置きはなくなるはずだが、エッシェリヒ警部が処罰したにもかかわらず、すぐ次の犯行が実行されるから、アレレ・・・？

それはともかく、本作後半に登場する犯人逮捕劇は時間的にも短いうえあつけなさ感があり、多くの観客は少し拍子抜けしてしまうのでは・・・？あれほど緻密で用心深かったオットーは、なぜそんなチョンボをしたの・・・？そう思わざるをえない。そのため、オットーの逮捕は必然だと思うものの、本作の逮捕劇の描き方には少し疑問も。さらに、もう少しまくやっていたら、ひょっとしてナチスの崩壊までオットーの逮捕はなかったのでは？そんな風に虫のいいことも思わないでもないが、それでは原作が誕生しなかっただろうし、本作も生まれなかったはず。しかし、それでも、もう少しまく・・・？

■□■2人のベテラン俳優の演技に注目！■□■

去る7月9日に観た『素敵な遺産相続』（17年）では、1934年生まれ女優シャーリー・マクレーンが光っていた。それに対し、本作では、静かに夫の決断と行動を支え、見守り、時には危険もいとわず夫と共に行動する妻アンナ・クヴェンゲルを演じたエマ・トンプソンの存在感が光っている。また、同日に観た『しあわせな人生の選択』（15年）では、末期ガンを宣告された男を演じたリカルド・ダリンと、カナダから来たその古い友人役を演じたハビエル・カマラの、互いに競うような静かで力強かつ渋い演技が光っていた。それに対し本作では、オットーを演じたブレンダン・グリーンソンの静かだが、断固とした決意に満ちた行動を示す演技が光っている。

とりわけ、この2人のベテラン俳優の演技の見事さが目立つのは、2人の犯行が露見し

逮捕されてから。オットーがエッシェリヒ警部に対して、「妻は関係ない」と弁解したり、それが通用しないと「妻だけは見逃してくれ」と懇願するのは、未練というもので少し見苦しいが、それはそれで夫婦間の愛情を示すものだから、やむをえない。それに対して、エッシェリヒ警部の綿密な捜査状況を目の当たりにしたオットーが、すぐに自分の立場を悟り、自己の罪を認めたのは潔い。もちろん、その後の2人の裁判、判決、死刑の執行は織り込み済みだが、本作では犯行が露見した後の2人の潔い態度に注目したい。

■□■英語劇の是非は？私はやっぱりドイツ語劇派だが・・・■□■

そんな2人のベテラン俳優のきっちり計算し尽くされた緻密な演技を見て思ったのは、本来はドイツ語劇であるべき本作をヴァンサン・ペレーズ監督があえて英語劇とし、ブレンダン・グリーソンとダニエル・ブリュールの2人を主役に起用したことの意味だ。ブライアン・シンガー監督の『ワルキューレ』(08年)がドイツ語でなく英語劇になったのは、主役のクラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐役にトム・クルーズを起用したためのやむを得ない選択(『シネマルーム22』115頁参照)で、本当はドイツ語劇にしたかったはずだ。しかし、本作は原作の英語版が世界中で大ヒットしたため映画化が実現したのだから、観客へのサービスのため(?)にも英語劇にすべき・・・?その点について、公式サイトでヴァンサン・ペレーズ監督は、「これはヨーロッパの映画だから、僕らは英語で製作することに決めた。あとはふさわしい役者を見つければよかったんだ」と語っているが、さて、その是非は？私はやっぱりドイツ語劇派だが・・・。

2017(平成29)年7月14日記

洋17-112 ★★★★★

「ヒトラーへの285枚の葉書」

2017（平成29）年7月11日鑑賞<シネ・リーブル梅田>

監督：ヴァンサン・ペレーズ

原作：ハンス・ファラダ「ベルリンに一人死す」（みすず書房 刊）

アンナ・クヴァンゲル（オットーの妻）／エマ・トンプソン

オットー・クヴァンゲル（軍需工場の職工長）／ブレンダン・グリーソン

エッシェリヒ警部／ダニエル・ブリュール

プラル大将／ミカエル・パーシェブラント

2016年・ドイツ・フランス・イギリス映画・103分

配給／アルバトロス・フィルム